

# 海が突然変貌した日 沿岸は瞬時に大惨事

昭和八年三月三日、穏やかな海は突然その姿を変貌させ大津波に変えました。

この日、三陸沖を震源とする三陸津波（マグニチュードM8.1）が発生。その三十分から一時間後、大津波が北海道と三陸の沿岸を襲ってきたのです。津波の高さ

## 津波地震の発生確率 30年間で20%と推測

あれから七十年。私たちの村は、幸いにも津波による大きな被害を受けていません。しかし、これからも大丈夫とは限りません。

は、岩手県沿岸で約十メートルに及び、特に大船渡市（旧三陸町）綾里湾では、二八・七メートルに達したと報告されています。

大津波は、村の沿岸集落（太田名部）をのみ込み、百三十七人も尊い命を奪い去りました。流失倒壊家屋は二百一戸にものぼりました。

政府の地震調査委員会は昨年八月、三陸沖北部から千葉県房総沖で大津波を起こす大地震の長期的な発生確率を公表しました。三陸沖から房総沖にかけては、太平洋プレートが日本海溝に沈み込んでいくため、プレートの境界を中心に大地震が繰り返し起きています。

同委員会は、日本海溝寄りで起きる津波地震は、明治二十九年の明治三陸地震（死者約二万二千人、マグニチュードM8.2）など過去四百年間に三回あり、今後三十年以内に同規模の地震が発生する確率は二〇%、五十年以内で三〇%と予測しました。

防災訓練で高台に避難する太田名部の住民たち



また日本海溝に近い、長さ約八〇〇キロ、幅約一〇〇キロの領域では、津波地震がどこでも起こる可能性があると考えられています。さらに、この領域では、昭和八年の三陸地震（死者約三千人、M8.1）のように太平洋プレートの中で起こる地震もあり同じタイプの地震の発生確率は四七%と予測しました。

三陸沖北部については、昭和四十三年の十勝沖地震（M7.9）のようなM8級の大地震の発生確率は、今後三十年で最大五%、五十年で三〇%と推定。ただし、三陸はるか沖地震のようなM7.6〜7.1規模の地震については、約十一・三年に一回発生していることなどから今後三十年で、九〇%程度と推測しました。

## 大津波の恐ろしさを 後世に伝えましょう

突然形相を変えて襲ってくる大津波。私たち人間は、その波の発生を未然に防ぐことはできませんが、津波を知り、備えることで、襲い来る災害から逃れることはできます。津波を知る第一歩は、体験者の話を聞き、津波の恐ろしさを心に焼き付けることです。

## 津波体験者は語る



赤坂 季一さん  
(83歳・太田名部)

三陸大津波は、私が十三歳のときでした。漁師たちは魚を捕るため、夜中の一時には浜に行っていて、沖にでる準備の最中だったといっています。

午前三時、大きな地震は下から持ち上げるようにたてに長くゆれました。何かが起きる地震の予感がして漁師らは、沖にでるのを中止、浜辺で様子を見ていたそうです。海の水が自然に引けていき、地震から三十分もたたないうちに、漁師たちの「津波だあ」という声がありました。

母は腰を抜き歩けなくなったので引つ張って逃げたのですが、沖が、電気でも照らしたかのように明るくなり本当に不気味でした。津波が来る前には風が起きるようで、沖のほうから小石がびゅんびゅん飛んできて、小石だけがをした人もいます。

津波の音はただの音ではなく、飛行機が低空で飛んだときのような、うなるような音で、津波の速さは百五十キロ、あつというまに集落は波にのまれたのです。波は寄せたり引いたり何回も繰り返していましたが、瓦礫の下から「助けでくれ」と女の人の叫ぶ声が恐ろしかったのを覚えています。

津波がおさまった後は、お互いが助け合って、流れた残骸を拾っては家を建て、おかげですすった記憶があります。

復旧は早く、二年ぐらいで復旧しました。津波は周期でくるといわれていますが、七十年前と違って今は港があり、立派な防波堤もあります。災害は最小限に食い止められるだろうとは思いますが、緊急災害時、万が一のために備えただけはしっかりとっておきたいものです。